

HIV 感染者と自己決定とソーシャルサポート ーカミングアウトとは？ー

大石 敏 寛*

PWAs' Self-determination Through My Experience of Second Coming-Out

This essay shows the meaning of coming-out as a gay man and second coming-out as a person with HIV. In the coming-out process, one comes to affirm oneself as both a gay man and a person with HIV. If one can not affirm oneself as she/he is, the coming-out may be just a "confession" in which, for example, one feels guilty of being gay and HIV positive. Furthermore I mention that when one wants to come out it will be necessary to have circumstances to do that and that people around her/him should be supportive to one who comes out. And the coming-out itself helps us to make such a comfortable circumstance for ourselves and self-determine our way of life.

キーワード

coming-out

second coming-out

communication

living with HIV

confession

I カミングアウトの意味

『カミングアウト』とは、自分が同性愛者であることを肯定的にとらえ、他人に対して明らかにすることを意味します。この言葉は、“come out of the closet (押入れから出る)”に由来します。closet とは、同性愛者を孤立の中に閉じ込める、同性愛者に差別的な社会の比喩であり、そんな社会から人間的

* 「せかんど かみんぐあうと」代表

な存在を回復しようとする同性愛者の姿を象徴しています。

II セカンド・カミングアウトの意味

『セカンド・カミングアウト』とは、同性愛者が HIV 感染者であることを公言することを意味します。エイズの広がりとともに、欧米の HIV 感染者が、みずから感染の事実を公言するようになり、広く知られるようになりました。

『セカンド・カミングアウト』という言葉は、同性愛者であること、そして HIV 感染者であること、この二重の社会的抑圧に、立ち向かおうとする意志に、裏打ちされています。

III カミングアウト・プロセス

『カミングアウト』を行う目的は、自分自身、あるいは自分が属している集団が社会から受けている差別や偏見に対して立ち向かい、改善していくことです。そのためには、自分自身を肯定しなければならないのです。自分の存在価値を信じることで、『カミングアウト』が可能となってくるのです。ここで注意しなければならないのは、自分自身を否定し、存在価値を見出せないまま、自分が抱えている問題を第三者に伝えることは、単なる『告白』にすぎないということです。『告白』は、第三者を自分の私的な領域に入れることであり、第三者の感情に訴えかけるものです。それゆえに、『カミングアウト』のように自分自身が公的な領域に出ていき、社会的抑圧に立ち向かうこととは違う意味合いがあるということです。しかし、『告白』と『カミングアウト』は違う意味があるとはいえ、『カミングアウト』を行うためのプロセスには『告白』という行為が重要な意味をもっているのです。

a. 自己を受け入れる

カミングアウトを行わなければならない存在というのは、まず、大多数で構成されている世間によって差別や偏見をもたれている少数の人々です。それゆ

えに、自分自身の存在価値を否定してしまったり、あるいは、誰にも気づかれないように、自分自身を抑えて周りに合わせたり、妥協して生きているケースが多いでしょう。それは、私たちが、あまりにも大多数の意見は正しいという錯覚を誰もがもってしまっているからです。

私は、『動くゲイとレズビアンの会（通称アカー）』に参加する1989年まで、周りに合わせて生きることを行っていました。小学生や中学生の頃、他の男子生徒と喋り方や仕草が違う、どちらかという、世間が固定観念として持っている女子生徒の喋り方や仕草に似ていたため、『おかま』『としこ』などと言われいじめられていました。

最初は抵抗したのですが、そのうち、このような喋り方や仕草をすることで、他の男子生徒と違うことが悪いと思ひ込み、大多数と違う自分に原因があると決めつけていました。そして次第に周りの言うことを受け入れていくようになっていたのです。そうすることで、私自身、大多数で構成している子供社会の中で孤立しないで生きていけると安心していただけました。高等学校に進み、次第に性への興味がわくようになりました。大多数の人々が異性に対し、精神的にも肉体的にも興味をもち始めていた頃、私は同性に対して興味をもち始めていました。しかし、ここでも、私自身、本心を周りに伝えるということはず、大多数の人々が抱く異性への興味を、私もあるということを周りに告げていました。それは、同性に興味があるということが周りに知られてしまうことで、孤立してしまうことを避けるための手段でもあったのです。このような状況下では、決して自己を受け入れることはできません。むしろ、自分の存在を自分自身で否定してしまっているのです。しかし、それは、そういう状況を許さない大多数の人々で構成された集団社会に問題があるのだと考えます。

自己を受け入れるためには、自分自身のことを安心して話ができる環境が必要でした。この環境とは、少なくとも、自分自身について話をしても否定されないことであり、そして、話をする中で、孤立しない状況でした。私が参加しているアカーとは、私にとって、自分自身を安心して語ることができる場所でした。かかわりだした頃は、まだ、自分自身を否定し続けていたこともあ

り、自分自身について話をするには『告白』にすぎませんでした。自分で自分自身の存在を否定しつつも、誰かに胸の内を聞いてもらいたいという思いが強くなりました。しかし、こうした『告白』は、聞いてくれている人々の質問や意見等によって、自分自身の過去をフィードバックし違う角度で掘り起こすという作業をすることで、徐々に変化していくのでした。1人で抱え込んでいたときには、どうしても自分の存在を否定してしまうのですが、自分と同じ環境におかれていた人々の体験談や意見を交わすことで、自分の存在を肯定していくことになったのです。それは、小学生や中学生の頃、自分の喋り方や仕草が他と違うことで、いじめにあったことの原因が自分にあったのではないこと、高等学校に通っている頃、抱いた興味を押し殺していた感情は、本来は押し殺す必要がないことを、ここで初めて認識し、そして私は、大多数の人々が言うことが必ずしも正しくはないのだということを学ぶのでした。

b. 『カミングアウト』『セカンド カミングアウト』へ

『カミングアウト』を行うことも、『セカンド・カミングアウト』を行うことも、基本的には、同じ作業を経なければなりません。そこで、ここでは、私が『セカンド・カミングアウト』を行うまでの過程について述べたいと思いますが、その前に、いくつか注意しておく点があります。それは、『セカンド・カミングアウト』とは、『カミングアウト』の過程を通らずには行えないということです。『セカンド・カミングアウト』とは同性愛者であること、HIV感染者であることという二重の社会的抑圧に立ち向かうということです。またHIV／エイズという問題は、自分自身の一部を除いて語るができないということです。それは、HIVの感染ルートが、現在は明確であり、日本社会においては、個人のプライベートな部分である性行為と密接な関係にあるからです。この部分とは、人それぞれの人間性の部分でもあるのです。したがって、自分自身を否定したまま、HIV／エイズを語ることは『カミングアウト』というよりも、むしろ『告白』に近いのかもしれませんが。現在、少しずつ家族の誰かに自分自身の感染を打ち明ける人々が増えてきていますが、それでも、感染経路に関しては、性行為ということは告げられても、性行為の対象に関して

は、曖昧にしてみたり、触れないようにしているというのが現状です。

ところで、私自身が『セカンド・カミングアウト』するまでには、約1年半の歳月が必要でした。感染を知った1991年12月、私は感染者である自分自身を肯定する作業を、まず第1にスタートしなければならなかったのです。最初の数か月は、自分自身を否定しようとする感情との葛藤の日々が続きました。

「死んでしまいたい」「生まれてこなければよかった」というような、当時は、自分を否定することばかり考えていました。そんな中で、私を支えてくれたのが、アカーの仲間でした。この数か月間、私は、自分自身を否定する日々を送ると同時に、感染していることを知った苦しみを仲間に『告白』していく作業を並行して行っていました。ここでの作業は、自己を受け入れる第一歩へとつながっていきました。こうした葛藤と作業を続けていくことで、次第に感染している自分自身を否定しなくなっていくのでした。このような作業は、自分が抱えている問題や不安に思っていることを明確にし、解決への方向に進むことが可能になりました。また、仲間に感染していることを伝えていくことで、感染者として生きていく環境を整えていくことにつながっていきました。こうして、私は自分自身にとっての最低ラインを確保しました。それは、今後、感染者である私を否定する人々が現れても、決して孤立しないでいられる環境をつくり上げたということです。

私の次の段階は、これまで、自分自身の存在を押し込めなければ、一緒にいられなかった人々へのアプローチでした。最初は家族に、そして、職場の同僚へと感染していることを告げていきました。それは、私が私であるためにいられる環境を拡大していくと同時に、『セカンド・カミングアウト』に向けた準備でもあったのです。1993年6月、ドイツのベルリンで行われた第9回国際エイズ会議で私は、自分が感染している同性愛者であることを世界に向けて発信しました。そして、8月には、日本国内において、厚生省記者クラブでの席上で、感染していることを公表しました。

Ⅳ 『セカンド・カミングアウト』ができる環境とは

『セカンド・カミングアウト』とは、ただ単に自分の意思を世間に伝えていくというだけではありません。前にも述べたように、『セカンド・カミングアウト』とは、二重の社会的差別に立ち向かうための手段です。社会的差別に対して1人で立ち向かうことは非常に困難であり、同時に限界もすぐに訪れるでしょう。そのために、1人で立ち向かうのではなく、多くの仲間を得ることで、1人ではなく、多くの仲間と社会的差別に立ち向かうことが可能になってきます。仲間とは、『セカンド・カミングアウト』を行っていくうえで、支えてくれる友人たちや家族、職場の同僚たちなどです。

仲間を得るためには、信頼関係を築き上げることが必要です。そのための手段として、コミュニケーション、つまり対話が重要な役割を担ってきます。私の場合、すでにアカーの仲間とは、常日頃からコミュニケーションをはかっていたため、感染がわかった数時間後には、感染の事実を打ち明けることができました。そして、打ち明けた仲間の協力により、家族へどのように伝えていけばいいのか、職場の同僚にはどうすれば、こちらの状況を理解してもらえるかななどを相談しながら、準備を進めることができました。そして、家族とも、あるいは職場の同僚とも、感染の事実を伝えてから、何度もエイズについて、あるいはHIVに感染していることについて対話をもつことで、次第に、私を支援してくれるようになっていきました。いつしか、私は、多くの仲間を得ることができていました。それは、家族なら、家族の立場からのサポートをしてくれ、職場の同僚は、職場の同僚としての立場から支援をしてくれました。支援の形態は様々ではありますが、どの支援が欠けても『セカンド・カミングアウト』はできなかつたでしょう。

V コミュニケーション・対話の役割

コミュニケーションをとることは、他にも様々な役割があります。たとえば、ある行動を行う場合、いとも簡単に行える場合と、頭では理解していてもなかなか実行に移せない場合とがあります。『セカンド・カミングアウト』を行うことも同じことです。確かに世間に対して HIV 感染者への差別・偏見をなくすために訴えていく重要性は、多くの患者・感染者は理解しているでしょう。しかし、様々な問題を抱えているために、訴えることを行う人々は非常に少ないというのが、今の日本の現状です。しかし、これもコミュニケーション・対話をもつことで、少しずつ可能になってくると考えます。第三者と話をすることで自分自身の感情が次第に変化していくでしょう。それは、感染者が第三者に対して、なんらかの影響を与えているのと同様に、私たち感染者も話をしたことに対して、意見を返してもらうことで、様々なことを考えたり、感じたりすることで、第三者から影響を受けることとなります。このような積み重ねが信頼関係を築き上げるだけでなく、『セカンド・カミングアウト』を行うための感情を生み出し、意志を確立させ行動へと移っていけるのです。しかし、コミュニケーション・対話をとるためには、感染者自身がその一步を踏み出さなければなりません。その一步を踏み出すことで、コミュニケーションが始まり、対話を行い続けていくことで、自分自身の感情が変化して、意志の確立を経て行動が可能になってくると考えます。私も、感染がわかってからこれまで、絶えず第三者とのコミュニケーション・対話をとるよう努めてきました。

VI エイズ患者／ HIV 感染者のサポートについて

現在、完治する薬の開発と並行して、発症した患者に対して、1つ1つの症状に対して治療を行うことが、少しずつ可能になってきています。ただ、現実的に考えたとき、完治する薬の開発に対して希望をもつことはあっても、今は、

ないことを前提に生活していかなければなりません。また、完治する薬が完成していない現在でも、本来は、人間としての当たり前な生活をすることは可能です。ところが、HIVに感染していることがわかると、それができないというのが現状なのです。今後の課題は、ウイルスを持っていても人間としての当たり前な生活をするを可能にするということです。

可能にする手段とは、コミュニケーションを相互にはかっていくことです。そして、ある者は、より多くの人々に患者・感染者の状況を伝えていくために、自分自身のすべてを語っていくことでしょう。また、ある人は、対話を通して、自分の住みやすい環境づくりを広げていくことでしょう。感染者が語り始めることで、より多くの人々がエイズについて、より身近に感じるようになってきます。そして、感染者と感染していない人々の間にコミュニケーションが生まれることで、感染者は感染していない人々からサポートを受けることが可能になり、感染していない人々は、感染者の教訓を学ぶことで、自分自身の身を守ることが可能になってくるのではないのでしょうか。サポートとは、一方通行ではなく、互いに得ることで、より現実的になってくるのです。

それと、もうひとつ、ここで考えなくてはならない問題があります。これまで、エイズは完治しない病気ということで恐れられてきました。もし、エイズが完治する病気であれば、誰もエイズを怖がりにはしなかったかもしれません。しかし、どうしてもこのままではいけないのでしょうか？ ウイルスと共に生きることは人間の尊厳を失うことなのではないでしょうか？ この問題はエイズだけではありません。この世の中には、完治しない病気はたくさんあります。症状も、生きていくうえで、何ら問題がない病気から、死に至る病気まで様々です。しかし、私たちは、健康と不健康、軽症と重症といった具合に優劣をつけてしまいます。この優劣によって、世間は人間の価値をつけてきました。そして、価値が低い存在の人間を、ある意味では犠牲にして社会がつくられてきました。こんな環境では、サポート体制は確立されません。病気であっても、そのままでもいいじゃないか、そのままでも、十分に人間として当たり前の生活ができるようにサポートしあえる社会をつくっていかうという考え方を確立すること

が今、求められているのではないかと思います。

Ⅶ ウイルスを持って生きることは……

多くのエイズ患者や HIV 感染者は、完治する薬が開発されることを望んでいます。それは、患者・感染者にとって、完治する薬が開発されないかぎり、自分たちが望む生活ができないからでしょう。ですから、完治する薬を望んでいる多くの人々のために、一日でも早く開発されることを、私も望みます。

ところで、私は完治する薬以上に望んでいるものがあります。それは、ウイルスを持っていても、病気によって、感染していない人々よりも早く死んでしまう結果となったとしても、生きてきてよかったと思える社会環境がつくれるということです。患者や感染者が早く完治したいという理由は様々あるでしょう。たとえば差別や偏見は、ウイルスを持っていることが原因と考えたり、あるいは、早期に死んでしまうかもしれないからという死に対するイメージばかりが先行してしまうからかもしれません。しかし、患者や感染者に対し差別・偏見をもっているのは、私たちと同じ人間であり、死に対するイメージをつくり上げたのも、同じ人間です。話が飛躍しすぎかもしれませんが、少なからずとも患者や感染者がウイルスを持っていることで、マイナス的な感情しかもちえないようにしているのは、エイズではなく、同じ人間なのです。ウイルスを持っていても、尊厳をもって生きていく資格を失うわけではありません。そして、死とはウイルスを持つことで、突然やってくるわけではなく、ウイルスを保持している人間ということで、やがて訪れる一瞬の出来事にすぎないのではないのでしょうか？

私が、セカンド・カミングアウトをするということは、ウイルスをなくすことが目的ではなく、ウイルスを持っていても、発症して早く死ぬ結果となったとしても、患者や感染者が自分らしく、人間として当たり前の生活ができる環境をつくっていくことだと考えています。